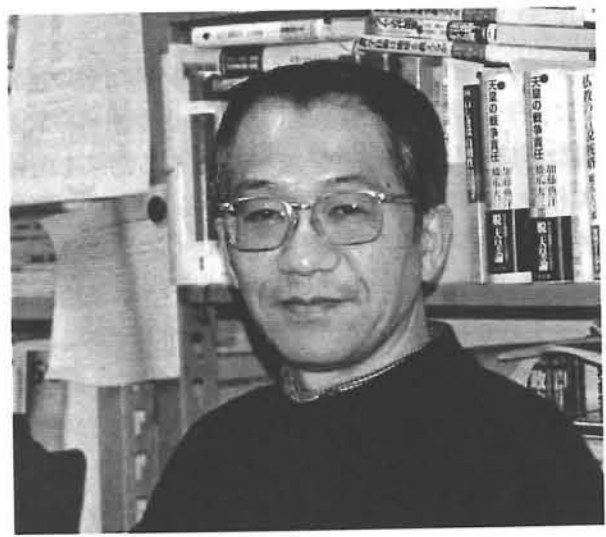


VIPに3びん

(第90回)



(ゲスト)
東京工業大学大学院社会理工学研究科教授
橋爪大三郎氏

【ご略歴】

1948年 神奈川県に生まれる
 1972年 東京大学文学部社会学科卒業
 1977年 東京大学大学院社会学研究科専攻博士課程修了
 1989年 東京工業大学工学部助教授 (社会学)
 1995年 東京工業大学工学部教授 (社会学)
 1996年 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授 (社会学)
 現在に至る

主な著書 『政治の教室』『世界がわかる宗教社会学入門』
 『言語派社会学の原理』『言語ゲームと社会理論』
 『仏教の言説戦略』『はじめての構造主義』
 『橋爪大三郎コレクション全3巻』『幸福のつくりかた』等



(聞き手)
FISC 理事長
大須敏生

[対談日：平成13年12月18日]

大須 今回ゲストにお願いしたのは、社会学の橋爪大三郎教授です。橋爪先生は、言語派社会学と呼ばれる新しい理論を提唱された「理論」社会学者ですが、草の根民主主義の実践を説いた『政治の教室』、或いは『世界がわかる宗教社会学入門』などの啓蒙書を上梓しておられるほか、幅広い評論活動も続けておられる、実践派の横顔もお持ちの方です。現在のわが国経済に漂う閉塞感、これは経済学よりはむしろ社会学の分析対象ではないかという感じもありますので、社会学について伺いするのは時宜にかなったことと申すことができるかと思えます。で、最初のごく簡単に、社会学に関心をお持ちになったきっかけのようなことから…。

たしか高等学校のとき社会学体系の如き叢書を読破されて以来、社会学を専攻しようとお考えになった、と何かの本で読みました。

橋爪 マルクス主義は当時流行っておりまして、先に資本論などを読んでいたら、それに惹かれていたかもしれません。結局、読んだ順番ですね。

大学の専門を文系にしようか理系にしようか悩んでいたとき、高校の図書館に行って、大分類で歴史、心理、社会といった項目がずっと並んでいる、開架式でね、それをずっと順番に少しずつ読んで行ったわけです。それで、社会学のところにたどりついたら、東大出版会で出している講座社会学全10巻がありました。これは安保闘争の直後に東大の人たちが中心になってまとめたアメリカ社会学の本ですが、結構左翼的なんですよ。人民のために社会を改良しようとか、そんなことも書いてあった。そんなものならやってもいいかなと。世の中の役に立つし、科学的だし。

橋爪 『20歳の頃』という本ですね、たぶん。立花隆ゼミの人の取材に応じて、そういう話をしたんですが、それが本になって…。

大須 その頃は、社会科学を志す人はみんなマルクスを一応は通過する。みんなでもないかもしれませんが…。

ところが、クラスにマルクス主義に詳しい、少し齧ったのがいて、「おまえ、社会学をやるなら絶交だ。社会学はブルジョワジーの学問だからあんなもんはやらない方がいいとレーニンが書いている。見下げた奴だ。」と言われてしまいました。そうかなとも思ったんですけど、もう決めてしまったものはしょうがないし、ということで、そのまま。

橋爪 まあ、みんなですねえ。

大須 マルクスの主著は資本論で、いわゆるマルクス経済学や唯物史観が理論の中心ですが、社会学に関心を絞られたのは、どういうお考えからですか。

大須 先生がお書きになっているものの中で、マックス・ウェーバーは最も偉大な社会学者である、ただし、カール・マルクスを除けば、と言っておられますね。

橋爪 カール・マルクスの時代には、社会学はなかったんです。社会学はコントから始まり、

19世紀の半ばにそういう名前が付けられたと言われていますが、その前は哲学だったし、経済学その他の学問の中に紛れていたわけです。マルクスは社会学的な仕事をたくさんしていると思うんですけど、社会学者であるという自覚なんか全然なかった。ですから社会学史には普通入れないんですよ。マックス・ウェーバーになると、確実に社会学者ですから、入れるんです。2人の偉大さを比べることは本来できないけれど、社会学者として見るとマルクスの方がちょっと偉大だと思いますね。

大須 それで大学は文学部社会学科にお進みになって、小室直樹博士に傾倒されることになったとか…。

橋爪 それは、こういうことなんです。大学の社会学の授業は、駒場で本郷でも、率直に言って全然おもしろくなかった。大学院に行ってもです。ところが、博士課程の1年のとき小室直樹という人がサブゼミ——自主ゼミですね——に学生を集めていて、数学も経済学も社会学も教えてくれるという話を聞いて、顔を出してみたんです。そうしたら、リーディング・アサインメント、来週までにこれを読んできなさいという宿題みたいなものがすごい量で、しかもほとんど社会学の本ではないわけです。彼は本当の学問をしていると、私は思いました。ですから、これはここで勉強しておかないといけないと覚悟を決めて、結局10年くらい指導いただいたということです。

大須 小室さんは、最近『数学嫌いな人のための数学の本』というユニークな本をお出しになって、大変な評判みたいですね。

橋爪 だいたいの本の中身は、授業でおっしゃっていたことですね。小室先生は、大事なことは反復して講義をなさるんですが、そのとき初めてゼミに来た人にまず当てる。答えられなかったりすると、次は去年から出ている人という具合に順番に当てられるんですね。だから私のように毎年出ている者は、常に小室さんの考え方をかみ砕いて自分の言葉で説明しなければいけない。ということをして10年やっていると、ほとんど覚えてしまうわけです。それは良いことだと思います。

大須 小室さんで記憶に残っているのは、日本の経済システムは資本主義じゃなくて社会主義だということを割合早くから言っておられたことです。ご専門は社会学なんですか。

橋爪 最後に社会学に落ち着いたのです。学問遍歴から言えば、はじめは経済学者で、その前は数学、物理など理系の学問を学んでいた。大学院の修士課程で経済学に進まれて、博士課程ではフルブライト留学生としてアメリカに行かれ、ミシガン大学、MIT、ハーバードその他で学ばれたんですね。MITではサミュエルソン、ハーバードではパーソンズの講義を聴かれたそうです。アメリカにいる間に社会科学全体についての視野を広げ、帰国したときは狭い意味の経済学ではなく、社会学者になっておられた。その上さらに政治学をや

ろうということで東大の法学部の大学院に入って、博士論文を書き、ついでに隣の建物の文学部社会学科とか裏の建物の人類学の中根千枝さんのところとか、いろいろ顔を出したんです。

大須 小室さんの自主ゼミを中心に学究生活が始まって、大学院を了えられたあと暫くは文筆活動をなさるわけですね。

橋爪 文学部ではオーバードクターが長いのです。当時日本史の人に聞いたら35才まで就職口はないとか。大学院を出るのが27才くらいですからね。考古学や哲学は35才どころか、40才とかそれ以上とか。今でもそうじゃないかと思います。結局、私は40才で就職をしました。

大須 資料によりますと、修士論文が「初期レヴィ=ストロース研究：『親族の基本構造』を中心に」とあります。これは、どういう研究ですか。

橋爪 当時の社会学にはほとんどリアリティがなかったんですけど、マルクス主義を脱構築している吉本隆明さんの仕事にはリアリティがあって、とても触発されたのです。吉本隆明さんは、柳田国男や折口信夫を踏まえて「南島論」という論文をお書きになった。南島とは沖縄のことです。その中にレヴィ=ストロースの紹介があった。日本の学者はレヴィ=ストロースの業績を十分吸収していない、翻訳もしていない、実にけしからんとね。

それで私は、レヴィ=ストロースという人がいて、大きな業績を上げていること、しかし日本の人類学者は彼の著作の翻訳をしていないということを知ったのです。しかしフランス語は読めないしなと思って、洋書屋に行ったら、英語のペーパーバックがあったんですよ。まず、構造人類学という論文集を買ってきて、第1章から順番に読んで行ったら実におもしろい。それでは主著の『親族の基本構造』というのを読みましようということで、フランス語版と英語版を買ってきて、翻訳をしたんです。で、吉本さんに手紙を書いて、翻訳をしたんですけどコピー要りますかと言ったら、要りますというから一部送って、それでちょっと恩返しできた。大したわけではないんですけど。

大須 構造人類学、或いは『親族の基本構造』、そういうものはなかなか一言では言えないかもしれませんが、どういうところが斬新で、しかもリアリティがあるということなんですか。

橋爪 構造という考え方は難しいんです。一口で言うと、人間が従っている無意識の行動のパターン、思考のパターンが構造なんですね。そういう意味では、マルクス主義で言う階級とかに近いのかもしれない。ただ、階級は歴史的なもので、昔はなくてある時できて、資本主義社会になると資本家と労働者の対立になり、やがてそれはなくなってしまうものだとされていた。構造主義では、構造は初めからあって、最後まである。歴史を通じて変

わらない。変化はするんですが、表面は変わっても深いところは変わらない。

そうすると、マルクス主義が言っていたような歴史的発展段階はないんだということになる。ですから、今まで世の中が良くなる、進歩すると考えて資本主義を社会主義へ変えようと運動をしていた人たちから見れば、その動機がなくなって、方向感覚が狂いますね。その方向感覚がなくなった状態でも人間性を追求する道はあるんだというふうに私は読めたので、それは大きな道しるべになったと思います。

大須 人類学というと、とっさに思い浮かべますのは人間の生物的な属性や営み、そういったものを観察し説明して、その原理や法則性を解明する、そんな学問のような気がしますね。それが社会学と…。

橋爪 19世紀の人類学はそんな感じでした。簡単に言うと、人間らしい人間は文明社会にしかない、植民地や第三世界にいる人間たちは人間らしくない人間、なかば動物みたいな人間だと考えた。そこで彼らの頭の形を測ったり、体重を量ったり、彼らの行動や習性をまるで動物でも研究するみたいに観察をして記述する。簡単に言うと、植民地支配がやりやすくなるようにする学問ということで発達したんですね。ところが、良心的な人類学者が調べれば調べるほど、未開人の文化の繊細さが分かってくるわけです。ただ、それが科学や技術の形をとっていないだけなんです。このように認識すると、未開から文明、そして

近代へと進化するという話ではなくて、要するに違うだけだと。今風に言うと異文化理解の問題だと。西洋近代から向こうの社会を見れば異文化、向こうから西洋近代を見ても異文化、お互い様ではないかと、対等の認識に変化していくわけです。

日本の社会科学にとっては、これは重要な転機でした。日本はヨーロッパに比べて遅れているからヨーロッパを真似しなくてはいけない。これは明治、大正、昭和を通じた社会科学の基本的発想でした。それはもう古い。そうではなくて、日本と西洋は単に互いに異文化なだけであって、対等にその違いを認識しよう。これが、社会科学に、人類学が持ち込んだ考え方です。

大須 よく分かりました。それで、現在の東京工業大学に飛ぶわけですが、その大学院社会理工学研究科の価値システム専攻、これは、VALDESと略称されているようですが、社会のトップに立つリーダーに必要な知識：価値システムと能力：意思決定を身につけさせるための大学院プログラムということですね。理工系の大学にこういう講座があるのがおもしろい…。

橋爪 戦争直後に和田小六先生という偉い学長がおられて、日本がアメリカと戦争をして負けたのは科学技術力が足りなかったからだ、そして科学者が十分科学的に思考しなかったからだと考えたんです。戦えば負けることは十分予測ができたし、負けると発言もできたはずなんですが、盲目的に専門に埋没してし

まった。これからの科学・工学を支える人材は、人文科学・社会科学の素養もなければダメである。そういう考え方で、カリキュラム改革をした。東大では2年の前期で教養課程は終わってしまうんですけど、東工大では3年、4年になっても在学中を通じて人文・社会科学と触れる機会があるというカリキュラムにしたんですね。そうして人文系のスタッフは外から人を引っ張ってくる。なかなかおもしろい人、ちょっと変わっている人、例えば宮城音弥さんとか、川喜田二郎さんとか。語学では、伊藤整さん、ほかに永井道雄さん、永井陽之助さん。鶴見俊輔さんも少しだけいらしたことがあります。江藤淳さんも1970年頃いらっしゃいました。

大須 今は諸学問の横の融合や学際研究が流行していますが、当時としてはかなり画期的な発想でしょうね。

橋爪 そうですね。旧制の高等学校が戦後、なくなりましたから、それをどう補うか、いろいろな議論があると思いますけれど、東工大がひとつのモデルになるのではないかと思います。

大須 先生は今「価値論理」講座の中の言説編成という研究分野にお名前が出ていますが、具体的に大学院ではどういう教え方をなさっていますか。何を教えておられますか。

橋爪 まず価値システムの説明をしなくてはダメですね。



社会理工学研究科の中にいくつか専攻があって、そのうち社会工学は中央政府や地方自治体の政策を研究し、経営工学は企業やNGOの政策を研究する。そして残った領域、個々の人間の行動を人間行動システム専攻が、社会的意思決定に関しては価値システム専攻が扱うと、分担を決めたのです。

ですから価値システムは、在来型のリーダーではなくて、人文・社会科学の素養と理学・工学の素養と両方を兼ねそなえた人材、そういう政策を立案できる人材、これを養成するプログラムなんです。

何を教えるかと言うと、哲学と数学。哲学というのは普通の言葉による価値判断のことであり、数学というのは記号、すなわち数学的、形式的言語による分析一般のことです。その価値システム専攻の講座のひとつとして価値論理がある。ここは主に自然言語を担当するところなんです。ほかに主に数学を分担する社会数理とそれらを総合する決定過程論と、3段階になっているわけです。

大須 今は政策科学ばやりで、政策科学大学院

などのように政策に密着したサイエンスやエンジニアリングみたいなことを方々の大学で教えるようになりましたね。そういう一連の動きの中であって、欠けている分野というか、特に高度のものを目指す分野を担うということですか。

橋爪 政策科学と言うと、ふつうは特定の政策分野のスペシャリストになるための訓練をするんですね。私たちのところは、それとちょっと違ってジェネラリストとしてのリーダーを養成する。特定の専門にむしろ分化していないタイプのトレーニングをする点が違うと思います。

大須 卒業生はどのような分野で活躍をしつつありますか。

橋爪 設立5年目ですから、早い人で就職して3年目ですけれども、実際に多いのは民間企業ではシンクタンクとかコンサルティング、銀行ならファイナンシャル分析の分野でしょうか。コンピュータを駆使して業務展開を図るような新興の企業分野ですね。あとは一般企業や大学など、いろいろなところに展開中です。

大須 言ってみれば21世紀に向けた「全天候型」のリーダー、或いはその前段階の実務家ということでしょうか。

橋爪 そうですね。

** 社会学の役割 **

大須 この辺で本題に入って、社会学という学問を取り上げてみたいと思います。実はこの対談の準備でブックセンターに行きまして、社会学の本が並んでいるコーナーをざっと見ましたら、概論のような本だけでも一抱えではおさまらない。その上、都市、農村或いは宗教など修飾語のようなものを付けた社会学のジャンルがたくさんありますね。俗に社会学は「何でもあり」の学問であると言いますが、先ほどお触れになったように哲学者のコントが社会学という言葉を使い始めて以来、マックス・ウェーバーとかデュルケムとか、ヨーロッパの大国にはそれぞれ一家を成すような大学者が出ています。一方、先生の、エズラ・ヴォーゲルさんとの対談を拝見すると、社会学「黄金時代」のハーバード大学のパーソンズとその流れを汲むアメリカ社会学の影響力の大きさを感じます。そこで、社会学が今どういう点で注目を集めているか、現代社会学の特色は何かといったことについてざっとお話ししたいと思っています。

橋爪 分かりやすく説明するために、日本が社会学という学問を受け入れた経緯を考えてみると、それは日本の近代化と結び付いているわけです。明治の10年代にスペンサーなどが翻訳されて広く読まれているようです。これが最初の社会学ブームだと思います。そのときなぜ読まれたかということ、当時の社会学はいわゆる社会進化論で、社会が一定の法則に

従って、どんどん良い方向に進化して行く、その流れは逆らえないと説いていたからでしょうね。日本は明治維新によって伝統が破壊され、旧来の日本の社会が新しい社会に切り換わる。それが文明開化なんだけれど、始めのうちはなかなか付いていけないという話もあった筈です。これに対し、「文明開化の方向でいいんだ」と科学の名において説明するという役割を果たしたのではないかと思います。その後も経済、軍事、政治といった分野で近代化がどんどん進みますが、その過程で失業、都市問題、イエ制度の解体その他、さまざまな混乱が起こります。この混乱をいろいろな現場の知恵で乗り切っていく、対症療法だけれどバンソウコウを貼るように解決して行く。それが社会学の役割だったのではないかと。戦前はあまり大した役割はその後ないですよ、実は。

戦後になると、マルクス主義が出てきます。さっき言ったように、レーニンが社会学を認めなかった関係で、マルクス主義者で社会学になる人が非常に少ない。これに対し、歴史学者は殆どマルクス主義者だった時期がありますし、マルクス経済学を信奉する人も非常に多かった。歴史学はマジョリティがマルクス主義者、経済学は半々、社会学になるとマイノリティなんです。それで、全体の社会科学のバランスの中で見ますと、マルクス主義を相対化するという役割が社会学にはあったと思うのです。高度成長と都市化、核家族化、公害等々、戦後日本にはさまざまな問題が出てきますが、こういった問題についてマルクス主義は必ずしも予想していない。そこ

で社会学がそれらについていろいろ言い、政府もそういうことを参考にして政策を樹てるという役割がずっと続いてきたのではないかと。

大須 基本的には実践の学問ということになりますか。現実には生じている問題を説明し、解決策を考える…。

橋爪 実践までは行かないのかもしれませんが、社会学者が100人いたとすると、10人くらいは理論屋さんで、本を読んではあれこれ理屈を言う。残りの90人は実証と称するのですけれど、農村の実地調査とか少年犯罪の原因調査とか分野に分かれて、それぞれ小さな学会を作って何とか社会学を名のるんですよ。

大須 少し話が戻りますが、レーニンはなぜ社会学を目の敵にしたのでしょうか。

橋爪 よく分かりません。よく分からないけれど、レーニンがそういう論文を書いたのは事実、レーニン全集に収められている。スターリンもそれを踏襲し、中国は革命の後、1950年代に社会学を禁止し、社会学科を解散させた。79年頃鄧小平が命令して復活させるまで、中国にはなかったんですよ。

** 構造＝機能分析 **

大須 なるほどねえ。もう一つ教えていただきたいのは、先ほど申したエズラ・ヴォーゲルさんがおられた頃のハーバードのアメリカ社

会学を代表するパーソンズの構造=機能分析という考え方についてです。

橋爪 構造=機能分析はアメリカでも日本でもとても流行りました。1960年代がピークだったと思いますが、70年代にも随分影響力があった考え方です。

流行った理由をいろいろ考えてみると、1つは科学的なものの考え方を、ある意味で押し進めたことです。社会は非常に複雑なので、モデルを立てるのは難しい。モデルが立たなければ科学的な分析は困難だ。ところが、パーソンズは、当時の先端科学と言っているのでしょうか、サイバネティクスとかシステム論とか、そういう40年代から50年代にかけての先端科学のアイデアを社会学にも適用できると考えたんですね。ですから、パーソンズはシステム、社会体系という言い方をしますが、全てが全てに連関している、そうした連関の全体をそのまま分析できるという考え方なのです。連関のあり方を構造と呼び、連関がお互いに影響を及ぼすかたちを機能とあって、構造と機能の組み合わせによって社会を分析できると考える。具体的に言うと、全体社会も分析できるし、全体社会の中に政府や市場や家庭や宗教や軍隊などいろいろな部分システムがある理由も説明できる。それぞれの集団の中の仕組みも説明できるし、個々の人間のパーソナリティも説明できる。1つの論理で全部説明できる、素晴らしいグラントセオリーなんです。

もう1つ、パーソンズが信頼された理由は、ヨーロッパのさまざまな知的潮流を社会学に

取り入れて、全体的な知識にしたことだと思います。アメリカ人はどちらかと言うとヨーロッパの学問に苦手意識を持っている。だいたいフランス語もドイツ語も読めない人が多いし、アメリカという国自体、伝統も社会階層もない国なので、ある意味で分析は簡単です。それだけでは、ヨーロッパの人たちが納得する世界的な学問にはならない。パーソンズは歴史学から出発したので、ウェーバーをよく読んでおり、ドイツ社会学に非常に詳しい。フランス語がどれだけ読めたか分かりませんが、デュルケムやイタリアのパレート、さらにフロイドとか小集団の実験、マリノフスキーの人類学その他、20世紀の前半に出てきた新しい思想的潮流を咀嚼して、それを先ほどのベタ社会的システムという枠組みの中に取り入れたんですね。パッチワークみたいなものですが、しかし1つのまとまりになっているという安心感があるんです。

つまり、ヨーロッパの学問を正しく継受し、かつ、最先端の科学的知識を取り入れたという2つの長所によって高く評価されたわけです。この最先端の学問を、日本も学ばなければいけないということで、60年代から70年代にかけての日本の社会学は構造=機能分析ほぼ一色だったと言っているんですね。

大須 経済学で使う産業連関表の考え方と共通性がありますね。非常に緻密な産業連関表を作り、投入産出係数などのパラメータを精緻に計算すれば、正確な経済予測もできるという楽観説、エンジニアリング的な楽観説が一時流行しましたね。それから計量経済学が



花開いて、構造方程式の本数をうんと増やし、龐大な計算をすれば、それだけ現実の世界に近似できるという思想、これも60年代には強かった。同根ですか。

橋爪 レオンチェフの産業連関分析の論理は、構造=機能分析の考え方とほぼ同じです。どちらもシステム論なんです。レオンチェフの産業部門に相当するものが、パーソンズの構造=機能分析では4部門なんです。構造は1つだが、それが4部門に分かれる。A, G, I, Lと順番にローマ字で頭文字をとって名前をつけていますが、A部門はだいたい市場に当たり、G部門はだいたい政府に当たり、みたいになっている。それぞれの部門が動くところから他の部門に対してアウトプット（出力）が及んでいく。その結果、他の部門の活動のレベルが上がって行って、そこからアウトプットがまた元のところに戻ってくる

という相互連関の考え方は、産業連関論とまったく同じですね。

大須 それが流行らなくなってきたのは、なぜでしょうか。現実の社会事象を十分に説明できないということですか。

橋爪 アメリカでこれがだんだん流行らなくなった理由と、日本で流行らなくなった理由とは、共通している部分と共通していない部分があると思います。

共通している部分から言うと、なかなかいいアイデアで立派な理論だけれど、これをどうやって使うのでしょうか。レオンチェフの産業連関分析では、投入産出係数がだいたい計算できる。そういう意味で実証的で実践的なんです。構造=機能分析では、ある機能の達成の度合いは計測できないから、インプット、アウトプットの係数が計算できない。係数が

計算できなければ予測ができない。機能が果たされたものやら果たされていないものやら分らないわけで、そこは社会学者の直感に頼るということになります。客観性がなく、実証性がない。さっき言ったグランドセオリーは、立派な理論という意味ですけど、大げさで中身がないという意味にもなるんですよ。

ヴォーゲル先生はパーソンズのお弟子さんですが、こういう理論の解釈学みたいなこと、何ページの何行目にはこう書いてあるけれど本当はこういう意味だとか、そういうことを大学院で散々勉強して、こんなに現実に使えないことを一生懸命勉強して何の役に立つのか、それより私は人間が好きだからインタビューをして生のデータから自分の直感で理論を立てたい、どうせ自分の直感を使うのなら生のデータから自分でやりましょうという人になってしまったわけです。パーソンズのお弟子さんの中にはいろいろ理論家もいたけれど、その人たちは論争の渦の中にだんだん埋没してしまって、実証家のヴォーゲル先生が頭角を現して、パーソンズの講座を継いだわけではないのだが、ハーバードの社会学科を背負って立ち次代を担ったということです。

2つ目の理由は、パーソンズの理論はやはりアメリカ社会にぴったり合うようにできていたことです。ですから、ヨーロッパ社会には少し合わない。東ヨーロッパやソ連だと、もっと合わなかったかもしれない。日本は資本主義ですから、合うように見えるんですけど、合わないところも多い。なぜ合わないのだろう。日本の社会学者としては、それは

一般理論と言うけれどやっぱりアメリカ社会にとってのカスタムメイドの理論であって、世界中の社会にうまく使える理論ではないのではないかと考えざるをえない。時代的、歴史的制約があるということは、科学ではないということです。科学でなければイデオロギーです。マルクス主義もイデオロギーですけど、パーソンズの構造＝機能分析もイデオロギーではないか。こんなかたちで学生の間で反発が起こる。これがもう1つの理由ではないでしょうか。

じゃあ、実際にはどのようにして現実にアプローチすればいいのか。パーソンズ以外の理論を探さなければならないとすると、しかもマルクス主義を使わないとなると、手頃な理論がない。そこでパーソンズの後は、この人がこういうことを言った、あの人がああいうことを言ったという小さな理論家がたくさん出てきて、細かなグループに分かれてしまう。お互いに話が通じなくなってしまう現象が起きました。

大須 構造＝機能分析の構造とは違う意味かもしれませんが、人間の行為を制約する外的条件というものがある。社会学では、人間の主観とか主体性といった行為をする側の力が制度などの外的条件を決めて行く方向を重視する見方と、逆に外的条件や制度、そういう制約が人間の行為を決めて行くという方向を重視する見方があるようですね。どちらに力点を置くかによって随分社会というものの説明の仕方が変わってくるように思いますが、その点はどうですか。

橋爪 社会現象全体をとらえようとする、その問題は必ず起こります。マルクス主義でも、構造＝機能分析でもそうです。マルクス主義のほうは、社会法則は絶対であるという考え方です。いわゆる歴史法則ですね。そうすると、個々の人間はいったいどうやって行動をしたらいいのだろう。社会法則は絶対なんだから自分がどう行動をしても関係ないとする、投げやりな態度になってしまうかもしれない。それではない、やはり歴史的に見て正しい行動をせよ、共産党に結集せよ、みたいなことを言ってもなかなかファイトが湧いてこない。そこで、主意主義的な考え方、主体性論が出てくる。マルクス主義の場合は実存主義がそれにあたりますが、一人ひとりの存在には理由がないけれど、でも頑張ってマルクス主義者として生きましようみたいな、サルトルみたいな考え方になるんですね。

構造＝機能分析の場合も、科学的に一定の法則があるという考え方、構造が個々人の行動を規定する側面が強調されるんです。これをパーソンズは社会化と言いました。例えば、赤ん坊は右も左も分からない状態で生まれてきて、物心がつき、社会人として行動できるようになりますね。それは自由をどんどん捨て去って、社会の規則を受け取って行くプロセスだと。この考え方は学生に評判が悪い。学生は、自分は自由なのになぜサラリーマンにならなければいけないのか、なぜこんなルールに従わなくてはいけないのか、本当に人間が自由だったら、社会構造に制約される理由なんかないではないかというふうに、主意主義的に行動しようとする。こういう構造

なんかない方がいいと思ったら構造を変えてもいいじゃないかと考える。そこで構造＝機能分析が構造変動を説明できるかどうかということが問題になりました。マルクス主義は社会構造の変化を説明できると称していたわけですが。構造＝機能分析ではそれができなくなると、何か見劣りがします。そこで論争となり、パーソンズの流れを汲む社会学者、特に学生たちは、理論はそうかも知れないけれど俺たちが実践によって社会を変えてみせてやると言っていて、世界中で社会学科の学生が大暴れをしたんです。ドイツでもアメリカでも学生運動の主役になったのが社会学科です。そうです。それはパーソンズに対する反発なんです。

大須 60年代の後半ですか。

橋爪 はい。理屈から言うと、個々人が主体的に行動することと社会構造がそこに存在することはニワトリとタマゴですから、どちらも同様に正しいはずなんですけれど、パーソンズの教科書を読むとそうは読めなくて、どうしてもまず構造ありき、人間はそれに従いなさいと読めてしまいます。それがベトナム戦争をやっていたアメリカの体制と理解されて、ステューデントパワーの反乱の対象となった。日本でもそれに似たことがありました。日本にはマルクス主義の学生が山のようにいたので、社会学の学生が騒ぐまでもなかったのですが、社会学の学生も騒ぎました。



** 言語派社会学 **

大須 先生のご提唱になっている言語派社会学は、今のような流れからどのように出てきたもので、どういうご主張ですか。

橋爪 マルクス主義との関係で言うと、マルクス主義の人間行動のとらえ方に何か問題があったのではないかと思ったんです。

マルクス主義では上部構造と下部構造を分け、下部構造が上部構造を決定すると主張するわけですが、ここに問題はないか。言語というものを考えてみると、これは人間を構成している本質的な働きなんです。ものを考えるにも言語を使うし、行動する場合も言語であらかじめ考えなければ行動ができないわけだから、言語は人間のかなり深いところにある。これをマルクス主義では上部構造として説明しているか下部構造として説明しているか。そこで、モスクワ哲学アカデミー監修の本を買ってきて、一生懸命に言語のところを見たら、曖昧なんです。上部構造でも下部構

造でも、どっちでもありませんと。わけの分からないことが書いてあるんですよ。それではと、マルクスを読んでも、やっぱり曖昧なんです。初期マルクスの経済学哲学草稿とかドイツイデオロギーとかに、労働について論じたところに言語についても書いてあるが、はっきりしない。言語の問題を正面から考えていないのではないかと思ってしまった。しかし、この問題から逃げてしまったら、社会学にも人間学にもならないだろう。この問題を正面から考えて議論を組み立て直せば、マルクス主義と独立に自分の立場が構成できるのではないか。マルクス主義との関係ではこういうふうに思いました。

パーソンズの構造=機能分析に関してもそうです。構造=機能分析は人間の行動を心理学のモデルで考えています。心理学といってもごく初期の行動主義の考え方、刺激があれば反応がおこるという考え方がとられています。これと基本的なロジックは同じというのがパーソンズの行動理論です。

私が思うに、人間というのは無秩序なわけではなくて、ある秩序を持って行動をしている。それでも自由なんです。しかし、パーソンズの考え方やマルクス主義の考え方では、言語を抜きに考えますから、人間はいろいろな行動の可能性を持っているから自由であって、そのうちの1つしかとれなくなれば不自由であるという論理しか出てこないんです。言語をモデルに人間を考えるなら、そんな簡単な結論にはなりません。言語の特徴は、いろいろな音が出せるけれども、アイウエオとか、限られた音しか出さない。むしろそのこ

とによって自由が獲得できるという、反対の発想になるのです。

それは泥とレンガの関係に似ています。泥が泥のままでは何もこしらえられません。しかし、それを形に入れて固めて1つのレンガにしますと、積み重ねて大きな空間を構成することができる。大きな考えや、大きな行動を組織することができる。考えを組み立てて行動を組織すれば、社会を作ることができる。その根本をずっと遡っていくと、人間にとって、言葉を使う能力が一番大事ではないか。動物にそれがなくて、人間にこれがある。これと、人間が社会を持つということは、根本的な関連があるんじゃないのかと、とりあえず仮説を立てた。これが言語派という発想です。それは社会システム論でも、マルクス主義でもない考え方です。

大須 それが社会を組み立てたり動かしたりする基本の原理だということですね。そういうふうに原理を把握することによって、社会学としてのいろいろな実証、現実の説明の仕方がどう変わってくるのでしょうか。

橋爪 それをひと口で説明するのは難しい。いまのべたようなことは、多くの人が薄々気がついていたことだろうと思います。構造主義もある意味ではそうです。それから、構造主義の流れを汲んだ人、例えばフーコーもそうです。

フーコーに言わせると、現実客観的に一通り、単にそこにあるものではない。それは人間が見るときに、そこにあるように見える

だけのものである。人間が見るときには必ず眼鏡をかけている。その眼鏡はその時代によって人びとに配られているものであって、これをエピステーメという。我々の社会がこういうふうに見えるのは、我々が現代の眼鏡をかけているからであって、18世紀の人たちには18世紀の社会が我々が見るのとは違ったように見えていた、それは18世紀の眼鏡をかけていたからだ。眼鏡が変わると現実が変わる。だけれども、眼鏡は現実の一部分だから、無秩序に変わるわけではなくて、何か法則性をもって変わっている。これが相対主義の考え方です。普通、認識というのは、現実が確実にここにあることを前提とする。確実にここにある現実を正しく認識しているのが真理であり、間違った認識を正しくしていきましょうというのが科学です。相対主義は科学に対して懐疑的なんです。人間は真理に近づくことが必ずしもできないという考えです。

言葉はそういう性質を持っています。言葉は絶対のものではなくて、変わる。そして、いくつも言葉があることから分かるように、社会によって違います。言葉は現実を表現するためのツールですから、Aという言葉を使えばAという言葉による現実、Bという言葉を使えばBという言葉の現実が生まれてきますが、これらは違うわけです。フーコーはそういう問題を指摘しているんですね。

科学哲学のトマス・クーンという人も、同じようなことを指摘しています。ニュートンのパラダイムとアインシュタインのパラダイムはどう違うか。アインシュタインが気がつ

いた実験上の誤差みたいなものは、実はアインシュタイン以外の人にも広く知られていて、19世紀の末にはニュートンの理論がびったり当てはまらないということは周知の事実だった。そのとき人びとは、ニュートンが正しく実験が間違っていると考えたんです。アインシュタインは、実験が正しくてニュートンが間違っているのではないかと考えた。それじゃニュートンを修正しなくてはいけないとあって、相対性理論が生まれた。なぜみんながアインシュタインのように考えられなかったのか。それはパラダイムという思考の枠、フーコーの考える眼鏡に相当するものがあって、それに縛られていたから、現実を現実のままに見ることができなかったから、とクーンは言うんです。

こういうことは、やはり同時代的にいろいろな人が考えたんです。マルクス主義は真理があるという考え方でした。これに対する反動として出てきたニューアカデミズムとか、構造主義とかは、マルクス主義に？（ハテナ）をつけました。構造主義の後から出てきた考え方は、？をもっとたくさんつけて、相対主義となった。私の考えもそういう動き方と連動していると思います。

** 権力と宗教 **

大須 ちょっと問題の設定が抽象的に過ぎたかもしれません。先生の著作を読みますと、しばしば取り上げておられるのは権力と宗教ですね。その2つについて、一般に分かりやすい啓蒙書を書いておられますが、素人考えで

は、権力は政治学の領域だし宗教には宗教学或いはそれぞれの神学なり仏教学があるわけで、それを社会学の中に全部取り込むのは、俗に言う社会学主義というか、社会学はすべての社会科学の大本であるというスペンサーの説を連想するのですが、先生が権力や宗教に特に力を入れられておられるのはどういうことからですか。

橋爪 理論家の仕事は、それを使うといちおう全てのことが考えられるという便利な枠組み（思考のツール）を作ることなんですね。それは眼鏡を作っているのと同じだから、かえってよくないことかもしれませんけれど、とりあえずそういうことをするとすると、部分的な現象を説明するのは割合に簡単です。例えば、ABCということ的前提にしてDを説明し、Eを説明するというときに、なぜABCが前提にできるかは、部分的な説明の場合には言わなくていいんです。しかし、全体としてみると説明になっていない可能性がありますね。例えばABCを、こんどはEで説明してしまう、という具合に。こういうところを考えるのが理論の一番大事な点です。

社会がこのようにあるというあり方は、いったいどうやって始まったのか。いったいどうやって支えられているのか。そういうところが、理論の中で一番大事なところなんです。それにいろいろな名前が付きます。ある人は、宗教という名前を付ける。宗教は、社会の外側に神がいる、仏がいる、社会の外側に何か大事なものがあるという信念です。みんなが社会の外側に大事なものがあると考え

れば、社会をその基準によって運営すればいい。しかし、社会の外側にそんなもの本当にあるのか。みんながそう信じているからあるのであり、みんなが信じていなければそんなものはないんですね。ここが宗教の非常に不思議なところ。社会の外側に大事なものがあるという信念それ自体を論じることができるのは、宗教社会学です。ですから、非常に興味深いわけです。

もう1つは、権力についてはフーコーがこんなふうに言っている。フーコーによると、さまざまな出来事は歴史的なものであり、偶然的なものである。例えばここにあるボールペンのプラスチックのキャップをとってみると、自然科学ではある原料に対して何度の温度でこういう圧力をかけたらこういう形になりました、という説明で終わりです。けれどもフーコーによると、ここにこういうものがあるのは、誰それが何年何月にこういう原理を考えて、それで工場を建てて、どうのこうのという話になる。この形が例えばヨーロッパのある伝統を踏まえた形だったとすれば、その伝統まで説明しないと説明したことにならないんですね。さっきのDEに対するABCにあたるわけです。こうして遡っていくと、際限がない。それを突きつめると、偶然の塊ということになる。偶然の塊では説明できませんが、説明できないまま、ここにこれしかない形で存在している。それと同じで、私たちの社会は選択できない形でここに実現されている。そこから話が発するから、これに名前を付けなければいけない。個々に考えると、偶然の塊だけれど、全体としては必然で



ある。フーコーはこれに、権力という名前を付けたんですね。

権力というのは、全ての人の外側にあって全ての人を拘束しています。そうすると、権力はなぜ人びとを拘束することができるのだろうかという疑問が生まれる。これは、神が存在すると人びとが信じているのと同じで、権力が存在するというのは、神が存在するのと同じ意味で錯覚なのではないか。

大須 貨幣はなぜ通用するかと考えるとき、貨幣は貨幣であるが故に通用すると言うのと似ていますね。

橋爪 貨幣の場合はいいのです。貨幣がない社会も現実に存在するし、貨幣は歴史的に出てきたものですから、そう言ってもいいんです。その意味で、貨幣は部分的な現象なんです。けれど、宗教や権力や言語という現象は、部分的とは言いにくい。例えば、ヨーロッパにキリスト教が広まる前には、ゲルマンの神があった。神を信じていなかった社会はあるだろうかと考えてみると、考えつかない。社会

に生きている人は、必ず何らかの神を信じているでしょう。こういうふうに理論的に考えますと、宗教や権力を説明する困難さは高いんです。

** リーダーの養成 **

大須 権力のご説明が出たところで、最後にひとつ先生にお伺いしたいのは、リーダー論です。過去10年くらいを振り返ってみると、政治改革に始まり、民主主義の原理に忠実に政治主導を貫徹せよとか、すべからず市場に任せよとか、いろいろ言われてとにかく日本の社会は動いてきましたが、どうも達観してみると、何か芯が抜けてしまった感じがあります。それはいろいろな解釈ができると思いますが、1つにはパブリックの領域、パブリックは民間部門に対する政府部門という意味ではなくて、私的な生活の中にも存在する公の秩序というか、みんなに共通する利益というか、そういう意味のパブリックです。そのパブリックの領域をあまりにも軽んじてきた、貶めてきたことに原因があるのではないかと。民主主義の手続きに従って選ばれる人たちは、当然「選良」であるから、相当の見識を備えた人であって、パブリックの領域にも目配りができる筈だという思い込みがあった。しかし、実際はどうもそうではないのではないかと。パブリックの領域を担うそれなりの人材が要る。それがリーダーでしょう。そういうリーダーをどうやって養成するかという問題が急務になっていると思うのです。ところが、リーダーとして国を担う筈の政治家は、二世、三

世が多いとか、官僚の、ある特定利益を長い間涵養してきた人が順ぐりになることが多いと言われていています。東工大のVALDESの目的は何かということになりますが、要するにリーダーを育てる仕組みをどうやって根付かせて行くのかということです。この問題については、日頃ご発言になっておられると思いますが、いかがですか。

橋爪 日本のリーダーは、組織の中で少しずつ昇進してこんがり焼けていく。下から入って職員食堂でメシを食って、いろいろな現場を散々歩いて、課長、部長、重役と昇進して大過なく勤め上げるといったパターンの人が多過ぎるわけです。

知事で非常に活躍している人に、最近小説家がありますね。田中知事とか、石原知事とか。小説家は本来、そういう、組織の中でこんがり焼けて昇進していくパターンの対極にある人ですね。自営業で売れないときも売れているときも全部自分で自分をマネージして、直接、読者公衆に言葉を届ける仕事の人です。それに失敗すると職業が成り立たない、という専門家です。個人の政治的意見はともあれ、そこは共通している。そういう人を知事にしてみたら、それなりにやるじゃないかという話なんです。組織の中にずっといると、あるタイプの仕事はできるようになり、あるタイプの知識が備わるようになるけれど、私から見ると、その反対の部分の資質がだんだん欠けていく。特にリーダーになるための資質が欠けていく。組織の一員としてトップの意思決定を支える人と、トップとして部下に支え

られながら何かを決めて行く人とは、人間として、職能として別なのではないか。リーダーを下から選んではいけないのではないかと。

どうするかと言うと、リーダー候補生みたいな人は、人数は少なくてもいいと思いますが、はじめからリーダー的な仕事をさせた方がいい。中小企業の社長さんとか、自営業とか、そういうところで少し揉んで、はじめは村長さんでも何でもいいですが、自分で何でも決めてしくじったらクビという約束で3年、5年、10年とやって、あとは勝ち上がり式にし、最後はトップリーグの国政に出て行く。そういう仕組みをこしらえないとダメだと思いますね。

大須 そうですね。ただ、それだと実際に何度も選挙の洗礼を受けて勝ち上がって行かなければならないシステムですから、政治は迎合術だといわれるとおりに、選挙のたびに特定の利益を年頭に置いて迎合して行かざるをえない。せつかくリーダーとして養成しようと思っても、私的な利益を超えて公的なところに重きを置くというメンタリティが次第に摩耗して行くわけですね。それに、地方議員からスタートして実績を上げて行くとなると、気が遠くなるほど時間がかかる。こんがり焼けるどころか、パサパサに干からびてしまうような気がします。

橋爪 いまは、リスクが大き過ぎて、候補者が少な過ぎるんです。リスクが大き過ぎると、ハイリスク・ハイリターンの仕事になり、ハイリスクを何かの理由で担える人が有利にな

るんですね。二世、三世の議員がそうです。それ以外だと、地方の名望家で造り酒屋の息子とか、高級官僚とかになってしまうんですよ。ですから、参入の敷居を下げる必要があります。誰でも出馬できて、長丁場の言論戦に参加できる予備選のような仕組みを作ったらどうか。アメリカの大統領選挙は約1年にわたる長丁場ですが、大統領を選ぶのはそれくらい慎重であっていい。日本の議員にしても、ある程度の候補者のプールがあって、そこに参入するのは自由で、勝手連みたいに連れてきてもいいし、指名してもいい。そうやって多数の中から、資質のない人は馬脚があらわれるくらいの過酷な試練を経て、最終的に3人なり2人なり1人に絞って行くというプロセスを経る必要がある。

大須 先生は『政治の教室』という啓蒙書の中で、国会議員の数を300人くらいに減らせ、小選挙区一本にし、予備選をやれ、次点にも歳費を払えと、ユニークな提言をしておられますが、私も基本的には国会議員を減らす方向には賛成です。ただ、ご提案の予備選挙が地方議員の選挙とは別に行われるとすると、あまりにも選挙が多過ぎないかという気がしますね。学生は決して社会公共のことに興味が無いわけではない。だからNGOなどにはよく参加する。しかし、選挙には行かないという現象が出てきているそうです。NGOその他、いわゆるボランティア活動が盛んになっていることは、ある意味では希望の星のようなところがありますが、このエネルギーが既存の政治のメカニズムに乗って行かない

ところに問題があります。そこはどのようにお考えですか。

橋爪 選挙が多過ぎるというお話ですが、アメリカなんかもっと選挙がたくさんありませんか。選挙で選ぶべき公職は、アメリカのほうが多いと思います。検事や保安官もみんな選んでいる。数の問題からしたら許容範囲ではないでしょうか。

大須 選挙の対象とする公職の数が多いうより、2段階の地方議員と国会議員が衆参両院ある、その代議制の多層化ということなんです。ある論者は、現代日本には代議制度に対する軽蔑が広がりつつあると言っていますが、心ある学生が選挙に行かないというのも、その現われではないか。

橋爪 たしかに数の問題ではない。例えば地方交付税とか、いろいろな補助金制度が、地方自治を魅力のないものにし、議員を利権に走らせるのだと思います。なぜ市議会議員や村議会議員にみんな立候補するかというと、動機は公共事業の箇所づけに影響力が発揮できるから。そう思って、土建屋さんはみんな立候補するわけです。当選して多少権力を手に入ると、納税者の税金は、全体の2割か3割しか使わず、残りは中央から補助金が貰える公共事業を取ってくることに専念するわけです。それを自分の会社で請け負えば利益が出るし、納税者はたくさん公共事業をやればやるほど図書館や公民館などいろいろな施設が建っていくので別に文句は言わない、とい

う仕組みになっている。国税を取って国がいったん集めたものを地方に分配して、利権にしているというところに最大の問題があると思います。

大須 そういう議論、補助金行政或いは交付税制度の下で地方に自主財源を十分与えないことが諸悪の根源であるという議論をおっしゃる学者の方が割合多いのですが、補助金目当ての公共事業の分捕り合戦が長期的に見ておかしい、地域の人たちの利益にはならないということが分かれば、代議制度がまともに機能している限り、そういう利益を代弁する人は選挙で負ける筈ですね。実際には、そういうことは起こっていない。地方自治の本旨に従って、地方の財源を充実し、名実ともに地方分権を進めたら、公共事業依存体質がなくなるか、そこのところは、実は詰めた議論がないのです。現に今でも大多数の知事さんは公共事業の代表選手である道路の拡張凍結の構想には反対しています。公選制の知事が機能しない、地方議会はさらに機能する見込みがないとなると、学者はそれでは住民投票を入れたらいいと言う。代議制が機能していないのを棚上げにしてね。そうやって手を変え品を変え選挙民を甘やかすことをやっているような気がする。その結果、日本という国の芯が消えて行く、タガが外れて行くのではないのでしょうか。

橋爪 私が言いたいのは、よい政治家は、人間としてよいわけではなくて、制度の下で適切に行動できる人だということなんです。つま

り、制度によって政治が変わってくるんです。地方交付税とか3割自治とかの仕組みがあれば、よい政治家とは、地方に利益を誘導し、公共事業を取ってくる政治家ということになってしまう。知事にせよ、町長にせよ、うまく中央と折り合いをつけて補助金付きの事業を持ってこようとするでしょう。選挙民から見てそういうことができない政治家は、この制度の下で不利益をもたらすわけですから、それは支持できない。そう考えて選挙民が現実的な選択をすると、現状のようになる。本来の住民自治になっていない今の制度に問題があるのだと思います。

納税した税金をどう使うかという点で地方自治が再組織されれば、公共事業をやればやるほど納税額が増えて、道路は立派になるが自分の家はボロボロになるわけだから、ほどほどにしようとする有権者も考えて、税金を増やさないために道路はこの程度でいいですよというタイプの政治家が選ばれる筈なんです。

大須 つまるところ、過疎地は放っておけよという議論ですね。過疎地は過疎地で、自然に親しむにはいい。水資源が豊富だからそのままにしておけよという議論です。我々都会人から見れば、それは一理ある議論だけれど、そこに住んでいる人にとっては、そうは行かない。過疎地はみんなで助けろ、都会の人が税金を負担して過疎地の道路を造れということが、国民的な世論だった。少なくとも選挙の結果では、そういうことが出てきたわけです。

橋爪 都市が富んで農村が貧しいという状況な

ら、それには合理性があります。現状はどうかと言うと、もうそういうものは一巡してしまっただけで、1本目の道路がうまく行ったから、もう1本造りましょうとなった。地方自治体は地元負担金が増えるから、公共事業が消化できなくなっているのに、まだ国がそれを押しつけようとしている。こういう段階になっています。こういう状態を是正するには、国会議員が、政治家が、新しい法律を通さなければならぬ。

大須 それはそうなんです。しかし、31年間役所におりまして、政治家がやってきたことを要約すると、「農」という言葉と「中小企業」という言葉が出てくると、電気が走ったようにパッと物事が決まるという現実ですね。40数年前社会人になって以来、こんなことはおかしいと思ったけれど、今の国会議員を頂点とするピラミッド構造の代議制度を続ける限り、絶対にそこは直らない。過疎地は過疎地なりに自主財源の範囲で細々とやれと言っても、住民はついてこないのです。山があったらぶち抜いて道路を造れ、という人が議員になる。そんなことをやってくれたのは角栄さんだけだと、他の県に行っても角栄さん、角栄さんなんです。自主財源を増やしたら、そういうメンタリティがにわかにならぬかと…。

橋爪 けれども、もうそんな時代じゃないんです。それができなければ日本は沈没です。地元の利益ばかり考えて補助金や公共事業のために奔走している政治家は、あまりに時代に

無知で、不勉強だと言いたい。これだけ補助金潰けになれば競争力はつかない、生産性は落ちるしかない。ギプスをつけている間に筋肉が萎えてしまったようなもので、やがて歩けなくなる。

大須 そうなんです。そのところが大変悲観的なんです。何か明るい話題はないでしょうかね。

橋爪 例えば銀行が破産して土地が放出される。それは、全然悪いことではない。不動産の取得価格が下がれば、サラリーマンにとっては貯蓄の必要がそれだけなくなって大変結構であるという側面があります。農家の経営が成り立たなくなれば、跡取りも出てこない。そうすると、農地が売りに出ます。それはやる気のある専業農家にとって規模拡大のチャンスになるんです。

大須 私は30数年前農林省に一時出向したことがあります。そのときまさに離農年金をヨーロッパに調べに行きました。規模拡大すれば生産性が上がるという理屈は当時から分かっていたし、一部の官僚にはやる気があった。しかし、現実には一歩も動かない。逆に言えば、それだけ困っていなかったということでしょう。ここに至って本当に困ってくれば、ブレイクスルーがあるかもしれない。

橋爪 人口が減る減ると言っている。誰が困るのか。別に困らないではないか。それと同じで、困る困ると言っているけれど、全

然困らない問題ってたくさんあると思います。

大須 困らないと動かないでしょうね。今日は時間を大幅に超過してしまい、ありがとうございました。

【対談を終えて】

本誌の一昨年12月号にご登場いただいたTRONの坂村健教授の書評に惹かれて、文春新書の新刊、高島俊男さんの「漢字と日本人」を買ったのが去年の年末近くでしたか。最近では珍しく、まさに開巻措く能わずといった感じで一気に読み、要所は再読しました。

この本の初版が出たのが去年の10月20日、その後品切れ続きで、私が漸く求めたのは12月15日発行の第6刷。読み易いけれど内容はかなり手ごわい本という印象なのによく売れている。受験生などの「特殊な」読者ではなく一般の読者に、漢字や国語に対する関心がそれほど高いとすれば、現代日本もまだまだ捨てたものではないという気がします。

「あとがき」を読むと、この本はもともと日本語における漢字の使われ方、役割といったことについて外国人向きに英語で解説した文章の原語版、つまり一字も漢字を使わずに書いた日本語の草稿を新書向きに「ふくらました」ものだそうです。もちろん実際には日本の読者に分り易くするために、実例を豊富に入れるなど「ふくらまし」作業は大変だったらしい。しかし、外国人向けに客観的に日本語の在りようを紹介するという当初の姿勢が、この本の論述を明晰にし、日本語と漢字に関する問題点を浮き彫りにする上で役立ったのではないのでしょうか。私の読み方はヒネクれているのかもしれませんが、古くは中国文明、明治以後

は西欧文明に対し抜き難いコンプレックスを抱き続けて来た日本という国の「辺境」性、そのことに伴う様々な精神的葛藤が、漢字の使われ方の歴史に如実に現れているように思われるのです。

橋爪先生の言われるように、人間の「言葉を使う能力」は人間が社会を持つということと根本的に関連している。日本という国、その社会の成り立ちは、日本語を抜きにしては考えられない。その日本語は、高島さんの表現によれば「顛倒した言語」、即ち耳で聴く音声ではなく文字が言語の実体を成す特殊な言語なのです。ただ、それが「顛倒した」のは文明開化の過程で同音異義語が無数に造られた明治以後のこと。そして「何より重要なことは、日本人がそのことをすこしも意識していない」ことだそうです。

しかし、文字のイメージで物事が一方的に良く見えたり悪く見えたりする例は多いし、世の識者たちはそこを「意識」しているふしがないではない。新大臣を迎えての外務省の改革案が当初「超骨太の」方針と報じられ、結局ただの「骨太の」方針に落ち着いたのはその辺りの機微を窺わせるものでしょう。文字によるレッテル貼りは「翼賛体制」を生み出し易い。言語派社会学のアプローチは、その種の危険を未然に防ぐ有効な手段たり得るのではないか。橋爪先生の益々のご活躍をお祈りする次第です。

(大須)

(文責：FISC)